

視覚障がい

視覚障がいは、視力と視野の障がいがあります。

視力障がいには全盲と弱視があります。全盲の人は文字を読めないので、点字を読んだり、録音された音声を聞いたりします。全盲の人は視覚障がい者の2割程度と言われます。一方、弱視の人は見えづらさにも個人差があり、中には目の見える人と同じように印刷した文字や拡大した文字を読む人もいます。視覚障がいのある人が全員、点字を使えるとは限りません。

また、視野障がいは、目を動かさずに見たときに見える範囲が狭いことをいいます。目からの情報が得にくいため、音声や手で触ることなどにより情報を得ています。

困っていることを理解しましょう

一般に、目が見える人は情報の80%以上を視覚から得ているといわれています。視覚障がいのある人は、周囲の音やにおい、風の流れ、皮膚の感覚などの視覚以外の感覚を使って生活しています。一人で歩くこと、文字の読み書き、日常生活のさまざまな動作が困難になります。また、音声による手がかりが的確に得られないと、周囲の状況を知ることが困難になります。歩くときは、白杖や盲導犬によって安全性を確認していますが、歩道に物が置いてあるなど、いつもと状況が異なるような場合や、慣れていない場所では一人で移動することが難しいです。



視覚障がいのある人が外出の際に最も不安に感じるのは、横断歩道を渡るときです。

音響式信号機など(39ページ)がない場合には、周りの人や車の音を頼りに渡ることになります。

視覚障がいのある人は、「あっち」「こっち」「そっち」などの指示語を使って説明されても分かりません。

白杖を持っている人は、全員が全盲ではなく、弱視の人もいます。

スマートフォンの画面を見ながら歩いている人(歩きスマホの人)とぶつかることがあります。



音声コード

